植草学園大学研究紀要　　第10巻　105 ～ 112頁（2018）

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.10, 105-112, 2018

調査報告

教員養成課程における学生の手縫い技能向上に関する実践的研究

馬場　彩果

植草学園大学発達教育学部

本学の小学校教員免許取得希望の学生における手縫いの機会は乏しく，その技能は未熟な状態にあった。そこで，卒業直後から手縫いの指導にあたることのできる教員の養成を目ざし，なみ縫いを中心とした手縫い技能向上を図ることを目的とした授業を実践した。

研究対象とした16名の学生は授業において毎回5分間の運針（なみ縫い練習）を行い，縫った距離を記録し，縫い目の出来栄えや集中力を自己評価した。全15回が終了し，各学生の最長運針距離の平均は初回と比較しおよそ3.8倍に伸びた。中には初回より10倍距離を伸ばした学生もいた。変化があったのは距離だけでなく，縫い目の細かさや均一さなども着実に上達し，全員の手縫い技能が向上したといえる結果となった。また，手縫いの実践を継続的に繰り返し，その記録を残すことは，学生自身も技能や自信，意欲の向上，家庭科の指導への有効性を実感することにつながった。

キーワード：教員養成課程，手縫い技能向上，運針，授業実践

１．はじめに

1.1　研究の背景および目的

現行（平成20年改訂）の小学校学習指導要領家庭編は，「実践的・体験的な学習活動を通して，家族と家庭の役割，生活に必要な衣，食，住，情報，産業等についての基礎的な理解と技能を養うとともに，それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を一層重視する観点から，その内容の改善を図る」等の改善基本方針により作成された[1)]。内容は「A家庭生活と家族」，「B日常の食事と調理の基礎」，「C快適な衣服と住まい」，「D身近な消費生活と環境」の４つで構成されている。本研究では，この中でまさに実践的・体験的な学習において基礎的な技能や実践的な態度が養われる分野の一つである，衣生活関連の製作に着目した。「C快適な衣服と住まい」は（１）「衣服の着用と手入れ」，（２）「快適な住まい方」，（３）「生活に役立つ物の製作」の３項目で構成されており，特に製作と関連しているのは（１）と（３）である。（１）では「イ日常着の手入れが必要であることが分かり，ボタン付けや洗濯ができること」，（３）では「イ手縫いや，ミシンを用いた直線縫いにより目的に応じた縫い方を考えて製作し，活用できること」と記されている。さらに（３）イについては，「手縫い」は糸通しや玉結び，玉どめ，なみ縫い，返し縫い，かがり縫いなどを扱い，なみ縫いは２～３針続けて縫う程度でもよいとの具体的な記述がある。「ミシンを用いた直線縫い」は，上糸，下糸の準備の仕方や縫い始め，縫い終わり，角の縫い方を考えた処理の仕方などが挙げられている。

また，平成29年３月公示の新学習指導要領では内容が「A家族・家庭生活」，「B衣食住の生活」，「C消費生活・環境」の３つに整理されたが，現行指導要領と同様にB（４）「衣服の着用と手入れに」おいてボタン付けを，（５）「生活を豊かにするための布を用いた製作」において手縫いやミシン縫いを取扱うことが示されている[2)]。

加地らは布を用いた製作について，「作る楽しさや達成感，活用することの喜びを充分感じることがで

きるような製作の学習になるように，指導したい」と述べている[3]。そのためには，指導にあたる教員に相応のスキルが必要となるのだが，髙橋らは教員養成課程の大学生が針と糸を使用する機会が少ないことを調査し,「教員免許取得希望の大学生をはじめ,ものづくりの経験が乏しい教員がおり，指導の際には教員自身の技能の定着を含めた教材研究を行っている」と推察している[4]。これらのことから，教員養成課程における学修内容によって，将来教員になる学生の技能に大きく差が出ることが予想される。

そこで本研究では，大学卒業直後から小学校現場に立ち，児童へ適切な手縫いの指導ができる教員の養成を目ざした授業実践を試みた。運針と記録の蓄積，学生の意識調査によって，なみ縫いを中心とした手縫いの技能向上の効果を検証することを目的とした。

1.2　研究対象者の実態

本研究の対象者は,本学の平成29年前期開講「初等家庭科教育通論」受講の１年生10名，２年生３名，３年生２名，４年生１名の計16名で，男子学生が６名，女子学生が10名とした。本授業は小学校免許取得希望者が履修する選択科目であり，全15回である。

初回授業時に小学校時代の家庭科の思い出を聞き合ったところ,その内容は調理実習ばかりであった。その他，布を用いた製作実習の話題が少々出た以外は学習内容を思い出せない様子であり，家庭科においていかに実習の授業が印象的であるかが浮き彫りとなった。このような状況は，室が教員養成課程の学生に対し，家庭科のイメージや印象的な授業を調査した研究結果に類似する点があった[5]。

次に，日常的になみ縫いを含む基礎縫いを行っているかを質問したところ，９名の学生は，ボタン付けやアルバイトの制服のほつれ直しなどの補修をときどき行うと答えたが，その機会は少ないようであった。１名は補修以外の目的でも積極的に裁縫を行っているとのことであった。残り６名の学生は，生活の中で針と糸を持つことはないと答えた。これも，日常生活で針と糸を使用する機会は少なく，使用する機会は主に補修の場面であるとした髙橋らの研究結果[4]とほぼ同様あり，本学学生もおおよそ一般的な実態にあると認識された。

２．方法

2.1　運針の授業実践

2.1.1　なみ縫い練習と記録の分析

山本らが，中学生のまつり縫いの技能について，反復練習によって時間内に縫える長さが顕著に増加したことなどを報告している[6]ことから，大学生においても手縫いの技能向上のためには，反復練習を継続的に行い，練習成果の振り返りをすることが重要ではないかと考えた。そこで，短い時間の中でも集中して手縫いに臨めて，成果の見やすい運針を授業に取り入れることにした。全15回の授業冒頭において学生に５分間の運針に取り組ませ，技能指導を行う実践を試みた。記録票を作成・配布し，運針終了後に学生が各自で日付，運針距離を記録するとともに，縫い目の揃い方と集中力について○･△･×の３段階で自己評価を行い，最後に感想を記入した。筆者はタイムキーパーをしながら技能指導にあたったが，初回の運針時は学生の実力を把握するため，指導や助言を行わなかった。第２回以降から全体指導や机間指導を行い，映像資料は３回用いた。指導内容は姿勢や針，布の持ち方，針の動かし方が中心であった。

授業実践後は記録票の分析をするとともに,初回･第５回・第10回・第15回に縫い終わった運針布を写真撮影し，画像データからも各学生の手縫い技能の変化を考察した。

2.1.2　運針について

運針とは針の運び方のことで，主に和裁で使われる用語である。布の表裏を同じ縫い目で縫う，手縫いの基本となるぐし縫いを指すことが多い。ぐし縫いはなみ縫いとも呼ばれ，小学校家庭科ではなみ縫いが扱われることから本研究においては，運針はなみ縫いを指すこととした。

運針で使用したのは，約60 × 20 ㎝で短辺を二つ折にした綿布と色も（しつけ糸），メリケン針７号である。本来，運針は縫い方の繰り返し練習が目的であるので，糸の玉どめはせず，糸がなくなればすぐに引き抜き同じ糸で再度縫い始めるものであるが，本研究では運針距離を計測する必要があるため，時間内に糸がなくなった場合には引き抜かずに

２本目を用意し続きから縫うこととした。また，必要に応じて玉どめをしてもよいとした。色もを使用した理由は，画像記録に残しやすい（見やすい）ことや，長さが均一なので学生が目安，目標をつけやすい点からである。ただし，しつけ糸は手縫い糸より撚りが弱くほつれやすいので繰り返しの使用には適さず，毎回新しい糸に替えるよう指示した。

2.2　学生への意識調査

2.2.1　アンケート調査の実施

最終授業後に質問紙によるアンケート調査を行い，回答を集計，分析した。質問紙は授業内で配布し，その時間内に回収したので回収率は100％であった。

2.2.2　質問紙の内容

設問１（１）本講義を受講する前，なみ縫いを含む基礎縫いは得意であったか。①～⑤の中であてはまる項目１つに○をつけなさい。①とても得意であった。②やや得意であった。③どちらともいえない。④やや不得意であった。⑤とても不得意であった。（２）④もしくは⑤を選択した場合，その理由を記述しなさい。

設問２（１）本講義で毎回運針を行ったことで，基礎縫いに対する自信に変化はあったか。①～⑤の中であてはまる項目１つに○をつけなさい。①とても向上した。②やや向上した。③どちらともいえない。④やや下落した。⑤かなり下落した。（２）④もしくは⑤を選択した場合，その理由を記述しなさい。

設問３（１）運針は，なみ縫いの技能向上のために効果的であったか。①～⑤の中であてはまる項目１つに○をつけなさい。①とても効果的であった。②やや効果的であった。③どちらともいえない。④あまり効果的でなかった。⑤まったく効果的でなかった。（２）①～⑤を選択した理由を記述しなさい。

設問４　運針について，身に付いた力や自分の変化，運針に対する考えの変化等，自由に記述しなさい。

３．結果と考察

3.1　初回の運針

筆者は初回の授業冒頭において運針用具を配布し，特に助言をせずにこれから５分間なみ縫いをすることのみ伝えた。学生は「できない」，「覚えていない」と困惑の表情を浮かべ，縫い針に糸を通すだけでも時間がかかったが，開始の合図とともに各々がこれまでの経験をもとになみ縫いを行った（写真１）。数年ぶりに針を持ったという学生もいたことから，慣れない手つきで苦戦している姿が見受けられたが，時間内は私語もなく集中して取り組んでいた。

初めて行った運針の距離を計測させると，4.0 ～ 28.5 ㎝という記録であり，平均すると 9.8 ㎝であった。16 名中 10 名の学生が 10 ㎝に達していなかった。福井らが小学校教員を目ざす大学生 150 名（男子 83 名，女子 67 名）に３分間のなみ縫いを練習なしで行わせたところ，長さは 1.1 ～ 25.6 ㎝，平均 16.3 ㎝であったとの報告がある[7)]。学生の平均距離から１分間に進む距離を計算すると，本学学生は 2.0 ㎝，福井らの研究対象学生は 5.4 ㎝であり，本学学生の方が 3.4 ㎝短い結果となる。

記録票の縫い目の自己評価は○１名，△ 12 名，×３名であり，感想欄には「数年ぶりでひどかった」，「久々で大変だった」，「難しかった」，「縫い目が大きかった」，「縫い目の間隔がばらばらだった」，「思ったように進まなかった」という苦労した思いや反省が多く綴られていた。その反面，「懐かしくて楽しかった」，「もっと得意になりたい」，「これから頑張りたい」など，楽しさを感じ今後の取り組みに意欲的な様子もあった。

写真１　運針の様子

3.2　第２回以降の運針と最長記録

第２回の結果は 4.0 ～ 46.0 ㎝で，平均 12.7 ㎝であり，12 名の学生が初回より距離が伸びた。２名は距離が縮んだが，これは感想欄に「先週より細かく丁寧にやったので長さはいかなかったがきれいにできた」,「距離は伸びなかったが丁寧にできた」などと書いたように，筆者が指導をした点や映像資料を意識したためと考えられる。残り２名は初回と同記録であった。

全 15 回の運針を終え，特徴的な結果が出た４名の学生について，記録票をもとに運針距離をグラフにまとめると図１のようになった。グラフ全体が右上がりになっており，回を重ねるにつれて運針距離が伸びていることが読み取れる。なお，授業を欠席した場合には折れ線が途切れている。

15 回のうちに記録された各自の最長距離は 12.8 ～ 74.0 ㎝となり，全学生が 10 ㎝を超える距離を縫えるようになったことがわかる。必ずしも最終回で最長距離が出たわけではないが，13 名において第 13 ～ 15 回の運針距離が最長記録となった。最長距離の平均は 37.3 ㎝で，初回の平均 9.8 ㎝と比べると 27.5 ㎝，およそ 3.8 倍に伸長した。16 名の中で最も距離を伸ばしたのは学生 15 で，初回 4.8 ㎝から最高 48.0 ㎝（第 13 回の記録）と実に 10 倍になった。次が初回 4.5 ㎝から最高 42.0 ㎝（第 15 回の記録）と 9.3 倍になった学生 11，次いで初回 4.5 ㎝から最高 37.5 ㎝（第 14 回の記録）と 8.3 倍になった学生６であった。

距離以外の成長の様子は，運針布を見ると明らかである。特に顕著な結果が表れた学生２名について取り上げる。写真２・３は，２名の学生の初回・第５回・第 10 回・第 15 回（最終回）の運針布を撮影したものである。写真２の学生 12 は,初回から整った縫い目で一定の距離を縫えていたが，回を重ねるごとに距離を徐々に伸ばしながら縫い目が非常に細かく，かつ均一になっている。また，写真３の学生 15 は，先述した通り最も距離を伸ばした学生である。初回は５㎝に満たなかったが第５回では 20 ㎝を超え，最終回では 30 ㎝を超えている。授業の後半には，長い距離もほぼ曲がらずに縫えるようになった。

また，縫い目の揃い方と集中力に対する三段階の自己評価については，初回の縫い目は○１名，△ 12 名，×３名であり，集中力は○ 13 名，△３名，×０名であった。最終回の縫い目は○９名,△７名，×０名であり，集中力は○ 14 名，△２名，×０名であった。最終回を初回と比較すると，縫い目は○が８名増加し，△が５名減少し，×が３名減少し０名になった。集中力は○が１名増加し，△が１名減少した。本研究では特に，縫い目の出来栄えに関す

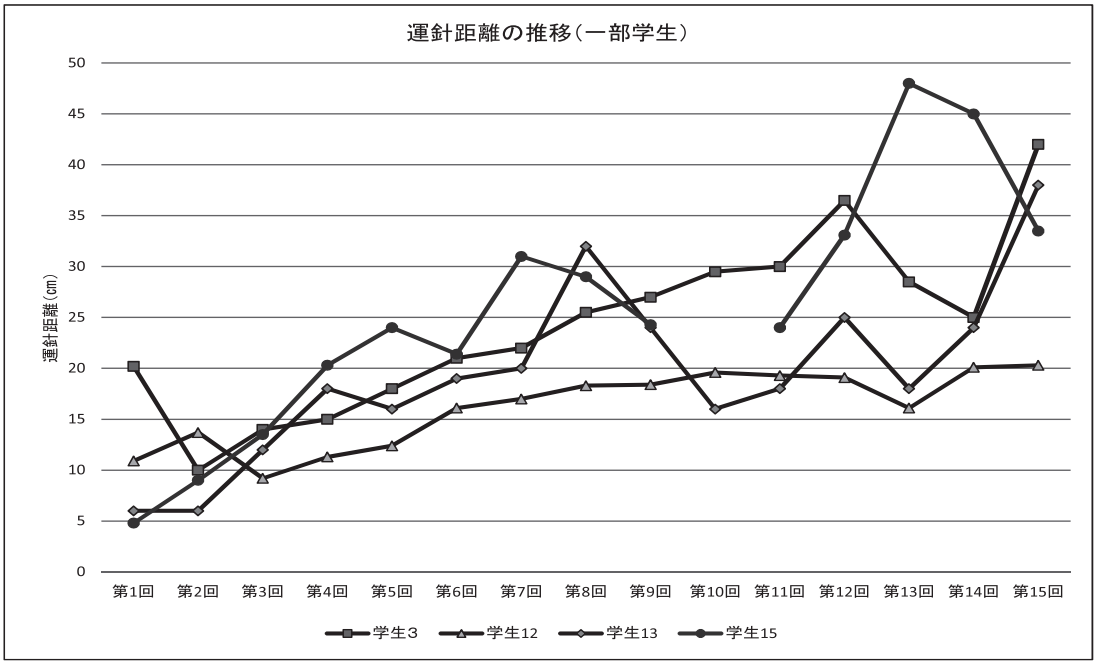

図１　一部学生の運針距離の推移

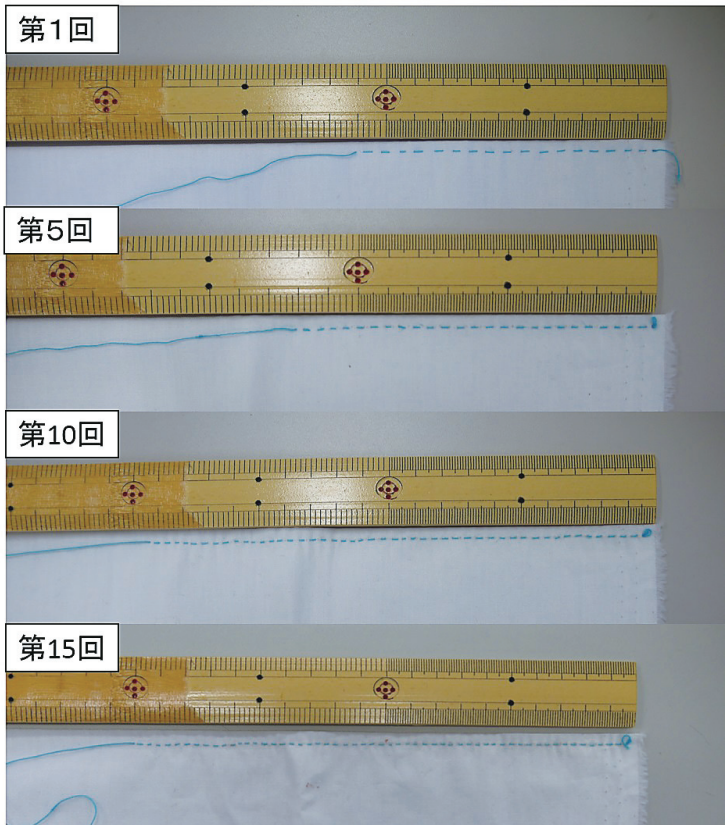

写真２　学生 12 の運針の変化

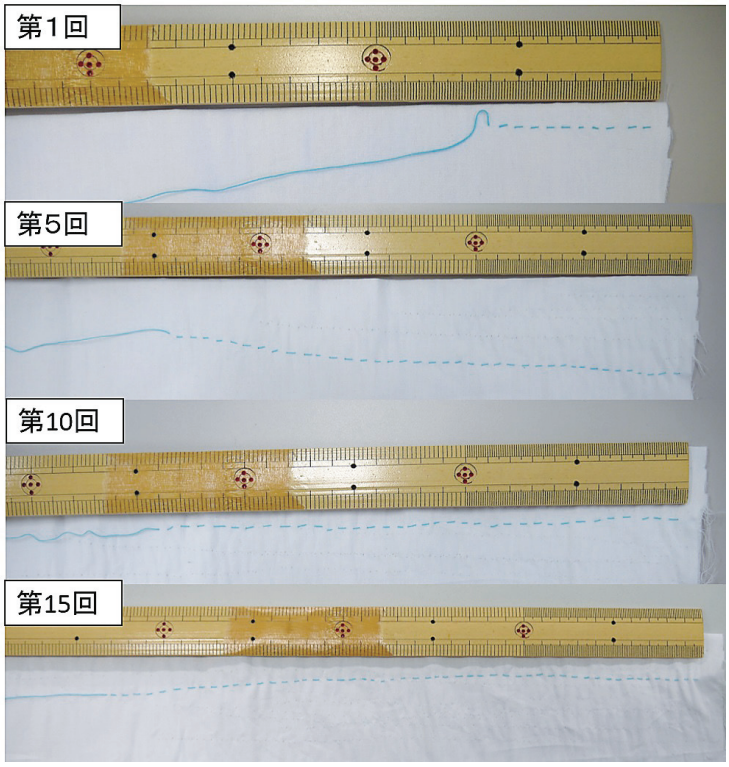

写真３　学生 15 の運針の変化

る自己評価が高まったことがわかる。

ここまで示したように，全学生が運針距離を伸ばしつつ，縫い目の細かさや均一さを高めることができた。縫い目については学生の自己評価も高まった。これらの結果は，運針の実践によってなみ縫いの技能が向上し，学生自身も技能向上を実感したと判断して差し支えないものと考えられる。

3.3　アンケート調査の結果

設問１（１）「本講義を受講する前，なみ縫いを含む基礎縫いが得意であったか」で①「とても得意であった」を選択したのが１名,②「やや得意であった」が７名，④「やや不得意であった」が６名，⑤「とても不得意であった」が２名であった。「とても得意であった」と「やや得意であった」を「得意グループ」,「やや不得意であった」と「とても不得意であった」を「不得意グループ」とすると,「得意グループ」と「不得意グループ」は半数ずつであることがわかった。不得意と感じた理由として,「まっすぐ縫えないから」,「不器用だから」,「よく指に針を刺していたから」,「途中で飽きたり雑でいいやと思ってしまったりしたから」といった記述があった。高校までに基礎縫いの技能が定着せず，それが苦手意識につながっていると考えられる。「得意グループ」の初回平均は 12.6 ㎝，最高記録平均は 41.8 ㎝で,平均3.3倍に記録が伸びた。一方,「不得意グループ」の初回平均は 7.1 ㎝,最高記録平均は 32.7 ㎝で,平均 4.6 倍に記録が伸びた。基礎縫いが不得意と感じていた学生の方が，得意と感じていた学生より記録の伸び方が大きいことが判明した。15 回の運針により技能の定着，向上につながったのではないかと考えられる。

設問２（１）「本講義で毎回運針を行ったことで，基礎縫いに対する自信に変化はあったか」で①「とても向上した」と②「やや向上した」を選択したのが各７名,③「どちらともいえない」が１名,⑤「かなり下落した」が１名であり，16 名中 14 名の学生は運針に取り組んだことにより基礎縫いの技能に自信をもつことができたといえる。⑤を選択した１名については，その理由に「直線を縫うことができなくなっていた」と記述していた。久々に手縫いをしたことで技能の低下を感じ，15 回の運針のみでは以前までの力を取り戻せなかったという意味ではないかと捉えられる。

設問３（１）「運針は，なみ縫いの技能向上のために効果的であったか」で①「とても効果的であった」を選択したのが 13 名，②「やや効果的であった」が２名，④「あまり効果的でなかった」が１名であった。（２）「①～⑤を選択した理由」には「毎回行うことによって，ちゃんとした成果がみられたから」,「初回に比べて記録がかなり伸びたから」,「何回もやることによって，技術の向上と自信が身に付くから」,「縫い目のきれいさよりも，気持ちを込めて縫うことが大切だと感じたから」,「毎週行うことで自然とコツを意識できる」,「５分間だけであっても,針に慣れることができたから」,「15 回の運針で，40 ㎝も長く縫えるようになったから」などの記述があり，運針がなみ縫いの技術向上に効果的であったことを実感したといえる。④を選択した１名の学生は，その理由を「時間を設定してしまうと，速さに頭がいってしまったから」としている。この点については，今後運針の指導を続けていくにあたり，いっそう丁寧な意識づけをする必要がある。

3.4　継続的な実践と記録の意義

アンケートの設問４「運針について，身に付いた力や自分の変化，運針に対する考えの変化等，自由に記述しなさい」では，学生のさまざまな考えが記述され，一人につき複数の回答があった。回答内容を分類したところ，最も多かったのは「まっすぐ針を扱えるようになって嬉しかった」,「今後，家でもやるかもしれないと思うほど楽しい時間だった」,「週に一度だったが，自分の成果を実感しながらやることができてとても楽しかった」など，自身の成長を喜び，運針に楽しさを感じる内容であり，10 名が記述した。また,「最初は苦手分野だったが，毎週やることによって自分でも気づくほど距離が伸び，それが自信につながった」,「元々まったくできなかった自分がここまでできるようになったのは驚いた」,「最初は 15 回で変化があるとは思わなかったが，少しずつ記録が伸びていき自分に自信がついてきた」など，15 回にわたり繰り返し運針に取り組むことが，技能の向上と自信につながったという記述も７名の学生にあった。自分に自信をもち，手

縫いの楽しさを実感するというのは，まさに小学校家庭科において児童に伝えたいことである。教員を目ざす学生がこのような考えを述べたことに，本研究の大きな成果を感じた。

さらに，「長さを測り記録として残しておくことで比較しやすく，記録が伸びると嬉しかった」，「毎回の記録や縫い目を見て技能の向上を感じた」という記述があり，単に練習を繰り返すだけでなく，毎回の練習を記録に残し振り返りを行ったことも技能や意欲の向上につながったものと考えられる。他にも,「やればやるだけうまくなることを伝えたくなった」，「毎回の運針によって針の扱い方や縫い方を知り，子どもの目線で物事を考える力が身に付いた」，「子どもには安全面をしっかり伝え，少しでも楽しいと思ってもらいたい」，「子どもたちの教育の場面でも，毎回行うことが大切だと感じた」など，教員や教育現場を具体的に意識した考えも見受けられ，今回の実践が家庭科の指導にもつながることを実感したものと推察される。

４．おわりに

運針の実践による学生の手縫い技能向上の効果を検証した。その結果，週１回，わずか５分間の練習であっても 15 回継続することで，全員に明らかな技能向上がみられた。同時に，達成感を味わい自信をもち，針を動かすことの楽しさや喜びを感じるなど，学生の内面にも前向きな変化が確認されたことは重要な成果といえる。本研究では，この経験を得た学生たちが具体的にどのように児童へ手縫いを指導するのか，どのような授業を提案するのかについて，指導案作成や模擬授業の時間などをとって検討するまでに及ばなかったので,今後の課題としたい。また，全員が教員として十分な技能水準に到達するための指導のあり方についても検討を行いたい。

５．倫理的配慮

個人情報の取扱いには十分配慮し，使用したデータから個人が特定されないようにした。また，写真やアンケートは研究目的のみに使用することの承諾を得ている。

文献

１）文部科学省．小学校学習指導要領解説・家庭編．東洋館出版社．2008

２）文部科学省．小学校学習指導要領解説．家庭．2017.（オンライン）．＜ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm ＞．参照 2017. 10. 12.

３）加地芳子，大塚眞理子（編著）．小学校家庭科概論―生活の学びを深めるために―．ミネルヴァ書房．2011

４）髙橋美登梨，西村綾世，川端博子．針と糸を使った製作学習における ICT 活用の提案―教員養成系学部の大学生を対象とした動画教材の効果の検証―．日本家庭科教育学会誌．2016；59（3）：135-143

５）室雅子．教員養成課程における大学生の家庭科観からみる家庭科教育の課題．椙山女学園大学研究論集．2014；45：239-249

６）山本夏帆，寶達佑美，鳴海多恵子．まつり縫いの反復練習に対する意識と効果．日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集．2013；56（0）：26

７）福井典代，速水多佳子．大学生における基礎縫い技能の実態調査．日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集．2017；60（0）：66

B.Edu.Health Sci.UG Univ. vol.10, 105-112, 2018 Information

Abstract

Implementation of Hand-Stitch Upskilling in Teacher Training Course

Ayaka BABA
Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

This practical report describes an upskilling course in hand-stitching for teachers soon after graduating from the school of education, the purpose of which is to train them how to teach hand-stitching to elementary school students. The teachers responded to a survey regarding their weekly five-minute hand-stitching practice, keeping track of their sewing measurements. As a consequence, their average sewing measurement improved about fourfold. The teachers realized their improvement and the effectiveness of repetitive hand-stitching practice.

Keywords: teacher training course, upskilling of hand-stitch, Unshin, implementation